

## 第２回委員会議事要旨

日 時：平成 27 年 3 月 3 日（火）14:00～16:00

場 所：豊田市役所 東庁舎 7 階 大会議室

## 1. 開会

## 2. 主催者挨拶（豊田市副市長）

## 3. 委員長挨拶（熊谷委員長）

## 4. 議事

## (1) 第 1 回委員会の確認について

① 第 1 回委員会の内容について、内容の確認がなされた。

## (2) 矢作川カルテ【概要版】について

① 対策方針について、内容の確認がなされ、承認を得た。

## (3) 矢作緑地の現状と課題について

① 課題および検討項目について、内容の確認がなされ、承認を得た。

## &lt;質疑における主な意見&gt;

## ○第 1 回検討会の確認

（委員）前回、豊田土地改良区の参加をお願いしたが、その後の経過をお教えいただきたい。

（事務局）豊田土地改良区に検討会への参加の要望をさせていただいているが、まだご承諾の回答は得ていない状況である。

## ○自然環境の視点

（委員）流量がある程度平滑化している中で、多様な状況をつくり出すには、分散型落差工や水制工は有効な手段である。事務局では、他の手段も考えているのか。

（事務局）現段階では、分散型落差工や水制工の手段しか思い当たらない。その他の手段があればご教授願いたい。

（委員）川自体の営力で砂州が移動して更新されていくのが一番健全な状態と思われる。流況の多様性を生み出すには、フラッシュ放流を行う等、疑似的に出水を起こ

させる例もある。物理的な場の多様性や時間的な変化の多様性の考え方も取り入れると良い。

- (委員) アユの産卵場は、仔魚が海まで到達しなければならない。豊田大橋あたりは河口から約 40 km地点であり、産卵仔魚が海まで到達するには非常に距離が長い。平戸橋で産卵親漁を人間の手で確保して、明治用水頭首工の下流に放流している。河川横断工作物の魚道では上ってくれるが、下るほうに非常に難儀している。豊田大橋付近では、保護のため網漁などを禁止している。
- (委員) 巴川が合流する地点では、国土交通省にお願いして、10 年ぐらい前に右岸側をブルドーザーでならして産卵場を作ったが、長い月日の間に、また埋まってしまった。明治用水頭首工の下流で資源としてはここが一番効率のいい場所であるため、何とか川の手で産卵場が自然にできるような対策をとっていただけるとありがたい。
- (委員) 明治用水頭首工では、魚道を孵化場にしたり放流時の流量など、漁協にいろいろ協力させていただいている。沈砂池の排泥工の開閉は手作業で何千回と回さないとならない。現在、農水省にお願いして電動化していこうと考えている。
- (委員) 最近の傾向として、水の量が減っていると考える。現在の受益は 5,600ha ほどに減ってきた。大きな原因は転作をしていること。矢作ダムでは、利水者の要望の水を足したものを毎日上から流しており、明治用水では 3 トンから 5 トンほど放流している。水量が減ってくれば川の水は減り、河床の二極化が進行することは当然のことと考える。
- (委員) 対策方針の中に、砂州の切り下げという言葉があるが、取った土はどうするのか。巴川の合流点付近から下流は河床低下が進んでいるため、土を河川外に出すのはどうかと思う。
- (事務局) 今回提示させていただいた対策方針ですが、取った土を河床が下がっているところに持っていくことも、色々ある手法の中の一つと思われる。

#### ○まちづくりの視点

- (委員) 矢作川の左岸は、河川の気化熱の影響を受けて温度軽減効果が出ている。高橋地区など、4 度くらいの効果が出ている箇所もある。しかし、無風時では、中心市街地は矢作川の気化熱効果はまず得られない。このような盆地底の場所では、温度の上昇率を下げるための施策がどうしても必要になってくる。豊田市は、微妙な風の動きで高温域が移動したり、あるいは気化熱の影響を受けたり、複雑であるため、ヒートアイランドの強度を増大させるポイントがわかれば具体的な施策につながっていく。
- (委員) 豊田市は、昼間は温度を下げる手段を考える必要があるが、夜に関しては、山から流れてくる冷気（山風）を利用できる場所でもある。ヒートアイランド強

度が高い場所は、高温、高湿、無風、さらに高濃度という可能性があり、自然をうまく利用しながら浄化し、どうにもならないところ、緑被率の増加、あるいは樹林率や緑陰率等の増加により温度を下げていくようなまちづくりを考えていただきたい。

- (委員) ヒートアイランド現象を防ぐ方法として、まちの中に川の水を流すというのも一つの手である。ヒートアイランドを防ぐような水を道路に流す等、打ち水のような考え方を人工的にやれば、もう少し防げると考える。矢作川は非常に水が細い川であるが、水がたくさんあるときには、そういうこともやっていいと考える。
- (委員) 豊田市の市街地あたりの年間降水量は 1,400 mm ぐらいで、中部日本の年間降水量 1,800 mm からいうと少ないほうである。それでも矢作川の水が枯れないのは、山があることによって 2,000 mm ぐらいの地形性降雨があり、その雨が地下浸透したり、表面流出して矢作川に流れてきて、矢作川の水が維持されているという状況がある。地形性降雨が起こらないような気圧配置が続くと、完全なダムの水の枯渇という状況になるため、ヒートアイランドの緩和について、人間の力でできるところはやっておく必要がある。
- (委員) 南西風が吹いている場合、高橋地区には非常に効果があるが、市街地には余り効果がないということか。
- (委員) 矢作川を挟んで、挙母地区の方が河川の風上になるため、気化熱の影響は余り得られない。ただ、河川の持つ熱容量によって周辺の温度変化をある程度緩やかにしている。

#### ○流域管理の視点

- (委員) 矢作川森林塾として足かけ 9 年かけて、スタジアム前の竹林を伐採した。竹を伐採し、実生の木を大きくすることで、まちの真ん中に都市林をつくりたいと考えている。このような活動を実施するときに大事なことは、自分たちの団体だけではなく、いろいろな人のご意見を聞き、援助を得ながらやっていく。そして、単発的に終わるのではなく長く続けていくことが大切だと考える。
- (委員) 巴川合流点の少し下流の左岸側には、江戸時代につくられたと思われる“だし”や、矢作川の中で最も古い、縄文時代からと考えられる渡し場跡がある。また、川舟の荷物に税金をかけていた分一番所があった。豊田東インター付近から遺跡が出ているので、このような渡し場跡も記述したほうが良い。
- (委員) 矢作川の学習として、パンフレットや説明書をつくって、小中学生にも説明するなりできるような方策をとることも住民に対する PR になる。史跡めぐりも行っても良いのではないかと考える。

- (委員) 高木を植えるという話と伐採するという話が両方出ているため、河川管理者を含め整理する必要がある。また、流域の管理は地元の方の参加が非常に有効であり、そのような団体ができていくと良いと考える。
- (委員) 扶桑付近の右岸には中州がある。ここは氷河時代に流れてきた玉石が堆積している。自然のつくったものであるので、大事にしていったほうが良い。

#### ○矢作緑地の現状と課題

- (委員) 河川というのは自然の公物であり、皆の財産というのが一般的であるため、空間を占有する場合は許可が要る。以前は厳しい基準であったが、最近では、地域の合意をもって、河川管理者がオープン化区域を指定してオープンカフェなどの営業活動が可能になった。
- (委員) 豊田市、全国に響くようなクルマの街という面も持ち合わせているが、すぐそばに大河川がまちのど真ん中を流れている。このような河川空間を利活用した活性化策というのも十分ポテンシャルがあると思う。
- (委員) 現地を確認したところ、川辺が見えるところが少ないが、古岸水辺公園や平戸橋の周辺は、竹林内に散策路があり対岸が見えるため、向こう岸の行ってみたいと思わせる。加えて、土木遺産の百々貯木場や民芸館もあり、有効な資源があると感じた。兩岸を渡れるような沈下橋があれば、歴史遺産を巡りながら散策できる。矢作川にねむる観光資源を発掘して、観光めぐりコースとしてPRしても良いと考える。
- (委員) 中心市街地に近い千石公園や白浜公園は、都心から歩いて楽しむ人は少ないと感じる。矢作川の上を豊田大橋、下を沈下橋と上下の回遊性を作ることも考えられる。また、河畔林内にベンチやテーブルが設置されれば、休憩スペースとして活用しやすいと考える。
- (委員) ロックコンサートを毎年開催しているが、開催においてはトイレが一番重要である。豊田スタジアム等の施設のトイレが活用できると非常にありがたいと感じる。川沿いにある施設を見直すなど、公共施設と矢作川との連動を図るため、有効な資産として再確認してはどうか。
- (委員) まち全体では無く、小さなスケールから段階的に進めていくことが有効であり、特に豊田スタジアム近辺から重点的に考えていく考え方もある。
- (委員) 現状では、スポーツ利用、散策利用、川遊びなどのアクティビティーが幾つか発生しているが、それぞれが自己完結的に集約されてしまっている。このため、アクティビティー同士の関係性が生まれにくい状況にある。二次的に生まれるアクティビティーが自然発生的に生まれてくれば、それ自体が新たな魅力になると考える。
- (委員) 親水性の向上については、河岸の緩傾斜化ということがポイントの一つであると

考える。終戦後、山地の土砂が供給され、河道が動いている時は、河岸にあまり草が生えずに緩傾斜となっていたが、現状では緩傾斜の河岸を維持することは難しい。対策工事を実施して緩傾斜にしても維持が困難な場所があるので、よく調査をして、緩傾斜の河岸を維持しやすいところを見つけることがポイントであると考え。

- (委員) 水力発電の仕組みなど、利害関係者や河川管理者、漁業組合などが、水を使った恩恵をPRすることが、流域住民への理解を得る道具の一つであると考え。
- (委員) 親水の面では、昔の子供たちは学校が終わったら外で遊んでいたが、現在は川や公園のみで遊んでいるわけではなく、何を狙っていくかがわからない状態である。
- (委員) 住民の水への意識が下がりっぱなしである。このため、水に関する施設には人が集まらない。以前講演会で、人を集めるためには、楽しいこと、儲かること、義理で行くこと、三つの原則があると聞いた。この原則のいずれかに当てはまる考えをした方がよい。

#### ○まとめ

- (委員) 矢作川カルテをつくるための対策方針は、承認をする。ただし、多少の修正点を今後詰める必要がある。
- (委員) 矢作川緑地内の回遊性の確保や親水性の確保について、事務局案が提示されたが、意見として出た集客性の高い魅力の模索や、川遊びの多様化等も含まれると考える。また、川が見えないことや高低差があることなどの意見は、市街地から矢作緑地へのアクセスの向上についての検討に含まれ、今後検討していく。
- (委員) 親水性の向上については、河岸状況の現況把握、親水の必要な箇所を選別、土木遺産の活用等の検討が必要である。また、住民との共働による整備については、樹木の伐採や植樹、清掃や公園管理等、実際の管理者は誰なのか検討が必要である。

#### 5. 閉会